

# つながる「ルネッセ」 未来に向けて文化を伝える活動

日本の文化を学び、育み、未来へつなげていくため、情報誌『CEL』での取材やイベントを通じて、その理論や方法論を真剣に考える方々に出会った。その交流のなかで「ルネッセ」の考え方に共鳴し、自身の活動に役立ててくれた人も多くいる。そうした方々の声を紹介する。

## 無理をしないで 文化を継承する道を探す

「気仙沼市地域福祉計画推進委員」 吉田千春 Yoshida Chiharu

CELの方たちと知り合ったのは、情報誌『CEL』116号で谷直樹さんと三浦史朗さんの対談が気仙沼で行われたとき。案内役として現地をめぐりながら、気仙沼の現状や漁

業をめぐる産業構造の仕組み、生活文化などについてお話ししました。これをきっかけに交流が始まり、気仙沼の復興とまちづくりをテーマに行われたルネッセ・セミナーで講師を務めました。



よしだ・ちはる

1971年、気仙沼市生まれ。2003年に「生きること」をテーマに任意団体を立ち上げる。2011年、東日本大震災を経験し、支援活動に従事。手仕事で女性を支援するプロジェクトを開始する。同年から5年間、宮城県震災復興情報発信局記者。2018年から現職。

私が生まれ育った鹿折地域は、東日本大震災で街全体が火事にさらされ、気仙沼の中でも最も被害が大きかった場所です。主要産業の漁業を中心に復興は進められてきましたが、人口減少と高齢化が進んでいるなかで、地

域をどう維持し、育てていくかが現在の課題になっています。そこで私が行ってきた支援活動は、アクティブシニアの女性を中心にした「手仕事づくり」です。手仕事を覚えてもらい、それを覚えた人が誰かに教え

ていく仕組みをつくりながらネットワークを育み、地域のコミュニティ機能を回復しようと模索しています。でも、いったん土地や人のつながりが崩れてしまった環境で、地域特有の食文化や行事などを継続することは難しくなっています。伝統を残さずして、地域が復興したと言えるのかという疑問はもちろんあります。しかし、伝統だからといって、すべてをそのままの形で残そうとするのは正しいやり方だと思いません。そのままの形ではなくとも、現在の生活のなかで続けられる方法を考えながら受け継いでいくことが、適切なプロセスではないかと思っています。復興やまちづくりというのは、どうしても皆が納得する正しい道に進



2017年11月に行われたルネッセ・セミナー。気仙沼の現状やまちづくりの方向性を語った吉田氏に、参加者から多くの質問が寄せられた。

もうと肩に力が入りがちです。でも、無理をせず自分たちに合った方法を見つければいいんだと考えられるようになったのは、池永所長からさまざまなまちづくりのあり方や考え方を聞いたおかげかもしれません。地

## 外国人こそ日本のことがわかります

「通訳者」 鐘燕 Angela

枕の下に置いて常に癒やされている本が2冊あります。1冊はインドのタゴールの『迷い鳥たち』で、もう1冊は日本の清少納言の『枕草子』です。インドの菩提樹や日本の平安時代の宮廷内の四季の美しさは、作家たちの感性を通して、国境を越え、時間を越えて、われわれに訴えかけます。

しかし、急激な経済成長を遂げながら、インド社会が身分制度などを抱えるのを問題視されているように、豊かな一方、さまざまな矛盾を孕む日本社会は、さながら失楽園のようだとおっしゃっています。「バブル崩壊」、「失われた20年」、「少子高齢化」、「自殺率上位」などの言葉は、日本人だけでなく、日本を語る外国人の口から必ず出てきます。本当に

域の歴史や文化を知り、その本質を掘り起こして、現代、未来への新しい価値をつくらうという「ルネッセ」の考え方は、これからのまちづくり、地域づくりを考えるうえで、大事なことだと思います。

日本はここまで凄まじい状況になっているのでしょうか。

3年前に初めて日本を訪問したとき、目に入ったのは澄み渡った青空、青々しい田んぼ、隅々まで綺麗な街ばかりで、まるで宮崎駿のアニメの中にいったかのように感動していました（宮崎駿のアニメを見ると、常にその美しさに感動させられて涙が出ます）。



ショウ・エン  
1989年、中国湖南省生まれ。通訳者。長沙大学日本語学部卒業。旭硝子に勤務したのち、日本語通訳者として活動。情報誌『CEL』120号での深圳取材に同行した。

滞在期間が長くなるにつれ、この感動は減るどころか、逆に増すばかりです。草の中で躍動しているトカゲ、捨てる前に必ず綺麗に洗われる牛乳瓶、親切な店員さんたち……とても平凡な風景だけれど、自然と頭が下がります。確かに、経済や社会は活力を失い、低迷状態になっています。しかし、これは決して失楽園の風景ではないと思います。

2018年夏、情報誌『CEL』120号での中国・深圳の取材に同行させていただきました。池永所長が遠いヨーロッパのオランダ・デンマーク、アジアの中国・シンガポールに奔走して、日本を再起動する道を探す姿に再び感動しました。

最近、手塚治虫の遺した傑作『どろろ』が再びアニメ化されました。鬼神により生まれつき体の48か所を奪われた少年・百鬼丸が、体を取り返すため妖怪を倒す苦難の旅に出る物語です。目も、耳も、皮膚までも

失い、ただ一つ残されたのはその純白の魂で、からくりの体を支えながら乱世の中で戦っています。私はこの少年から日本の姿が見えました。それは、平安時代の清少納言の『枕草子』の感性の魂、室町時代の戦乱の中の侍の魂、現代の綺麗な日本をつくった人々の幸せを求める魂です。

タゴールは訪日したとき、「外国人こそ日本のことがわかります」と話しました。それは、私と同じく日

本の魂を見たのだと思います。経済の暗雲を透してその魂を見つければ、必ず幸せにたどり着けると思います。

## 想像力を豊かにする大阪で若者のための「場」をつくる

「株式会社結コンサルティング代表」 トロイアノス・アンジェラ Troianos Angela

私はアメリカ・シカゴに育ち、イリノイ大学を卒業後、いろいろなご縁があって2004年にJETプログラム（語学指導などを行う外国青年招致事業）で日本に来ました。日本語もまったく話せないまま来日し、愛媛県伊方町、大阪府寝屋川市で働いた後、2015年に同志社大学大学院ビジネス研究科を卒業しました。大学で学んでいたときに、ナレッジマネジメントや持続可能な社会のためにビジネスで何ができるかと

いった課題を専攻していたのですが、そのなかで、大阪で生き続けている伝統的な商業センスに興味を持ちました。大阪の人はオープンで人との距離感が近いと感じます。また、世界から人や物が集まってきた歴史をもち、私のような言葉の壁がある外国人もフレンドリーに受け入れる柔軟性がある。自分たちの文化を守りながら国際的なふるまいもできるそのセンスは、文化遺産といえるのではないかと思います。

現在、関西領事団の事務局長を務めており、高校生と総領事によるシンポジウムを開いたことがあります。そこで講義をしてくださった池永所長とご縁がつながり、「ルネッセ」のイベントの参加者を募るお手伝いをしました。当日は私も参加



トロイアノス・アンジェラ  
1976年、アメリカ生まれ。2004年来日。関西領事団事務局長として同団と行政機関や民間団体との橋渡しを担当。2018年11月、公的・文化関係機関へのコミュニティコンサルティング、トレーニング・プロジェクトマネジメントを提供する株式会社結コンサルティングを設立。

したので、素晴らしい内容で、大阪の歴史や遺産について知ることができました。こうした大阪の精神や風土をもっと若い世代が学んでいくことが大事だと感じました。

こうした経験から、若者や外国人の視野を入れた「場」をつくれるようなソーシャルビジネスを始めたかと考え、会社を立ち上げました。

今の若者は可能性にあふれています。ただ、これまで語学指導をした経験からも、彼らは外に目を向けない傾向があることや、与えられた問題の解決はできても自分で問題を提起する力が弱いと感じます。何よりいろいろなことを知り、考える機会や場がないのです。これは学校の問題というより、社会と横のつながりがないのが問題ではないかと考えています。大阪という土地には想像力を豊かにするポテンシャルがあります。そこからもっと若者が学べるようにしていきたいです。

新しく起こした社名はいろいろな物を結びつなげたいという願いから「結」としました。NGOではなく株式会社としたのは、社会への貢献として活動することを重んじたからです。今のところスタッフは私ひとり、規模は小さいけれども、これまでに私が大阪から学んだことを生かすことができる範囲で次世代の未来への支援ができればと思っています。



右/シンポジウムと連動して行われた「大阪・和の暮らしを体験する会」には、多くの外国人の方が参加した。左/「『上方の生活文化』を考えるシンポジウム」でコメントを寄せるアンジェラ氏。



右/世界最速で成長を続けるといわれる実験都市・深圳。左/高性能ロボットアームを開発するメーカーへの取材で、通訳を担当した鐘燕氏（写真中央）。

